

博 多 78

— 博多遺跡群第121次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第669集

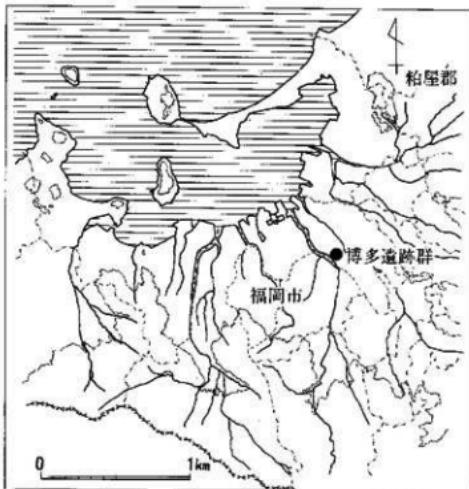
2001

福岡市教育委員会

博多 78

— 博多遺跡群第121次発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第669集



遺跡略号 HKT-121
遺跡調査番号 9960

2001

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化の門として栄えた都市遺跡「博多」の発掘調査は近年の都心部の再開発に伴い、現在までに120次を越え、調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書はビル建設に伴って実施された第121次調査の概要を報告するものです。国際貿易都市「博多」の繁栄を示す輸入陶磁器の出土等、大変興味深い成果を収めています。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた地権者の株式会社宝清インターナショナルの方々をはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成13年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例　　言

1. 本書はビル建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成11(1999)年度に発掘調査を実施した福岡市博多区中央服町57番1、2所在の博多遺跡群第121次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測・製図・撮影は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測は第11・12図を土橋尚起が、他は佐藤が行い、製図・撮影は佐藤があたった。
4. 本書の執筆・編集は佐藤が行った。
5. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	9960	遺跡略号	HKT-121
調査地地籍	福岡市博多区中央服町57番1、2	分布地図番号	千代博多 48
開発面積	146m ²	調査面積	89m ²
調査期間	1999(平成11)年12月13日～2000(平成12)年1月27日		

目 次

序

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査の組織	1
II	発掘調査の概要	1
III	遺構と遺物	4
1	検出遺構	4
2	出土遺物	7
IV	小結	17

表 目 次

第1表	出土土器計測表	18
-----	---------	----

挿 図 目 次

第1図	博多遺跡群発掘調査地域図(1/7,500)	2
第2図	博多遺跡群第121次調査地域周辺図(1/1,000)	3
第3図	博多遺跡群第121次調査遺構配置図(1/75)	4
第4図	SK01・09・13、SE08、SX07実測図(1/40)	5
第5図	SE04実測図(1/40)	6
第6図	SK01出土遺物実測図(1/3)	7
第7図	SE04出土遺物実測図(1/3)	8
第8図	SK05・02、SX07、SK03、Pit06・07出土遺物実測図(1/3)	10
第9図	SE08、SK09出土遺物実測図(1/3・1/4)	11
第10図	包含層出土遺物実測図(1)(1/3)	13
第11図	包含層出土遺物実測図(2)(1/3・1/4)	14
第12図	石製品・土製品実測図(1/3)	15

図 版 目 次

図版 1 (1) 博多遺跡群第121次調査区全景(北から)

(2) SE04井戸(東から)

図版 2 (1) SX07(東から)

(2) SE08井戸土層(東から)

図版 3 (1) SK09土壤(東から)

(2) 博多遺跡群第121次調査区北側（西から）

図版 4 (1) 博多遺跡群第121次調査区北側（東から）

(2) SK13（南から）

図版 5 SK01、SE08、SK09・SK13出土遺物

図版 6 SE04出土遺物

図版 7 SK05・02、SX07、SK03、Pit06・Pit07出土遺物

図版 8 包含層出土遺物(1)

図版 9 包含層出土遺物(2)

図版10 石製品・土製品

I はじめに

1 調査にいたる経過

1999（平成11）年6月22日、株式会社宝清インターナショナルから本市に対して博多区中呉服町57番1、2におけるビル建築に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群の中央のやや西寄りに位置し、申請地に近接する現道部分では地下鉄建設に伴う発掘調査が行われている。福岡市教育委員会埋蔵文化財課はこれを受けて1999（平成11）年9月9日に試掘調査を実施した。現況は店舗跡地で更地となっており、調査の結果、深く擾乱が及んでいるものの現地表下1.6mで造物包含層（黒灰色砂質土）、同2mの地山の黄白色砂上面で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積146.29m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。株式会社宝清インターナショナルと福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年12月13日から翌1月27日まで行われた。

2 調査の組織

調査委託 株式会社宝清インターナショナル

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査統括 埋蔵文化財課長 山崎純男

第2係長 方武卓治

庶務担当 谷口真由美（前任） 御手洗 清（現任）

調査担当 試掘調査 杉山富雄 宮井善朗

発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 大崎宏之・尾花憲吾・吉川春美・木山啓子・田原キヌエ・為房絢子

西尾タツヨ・播磨博子・本郷満子・山口慶子・萬スミヨ・土橋尚起・相川和子・藤野邦子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の株式会社宝清インターナショナルをはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

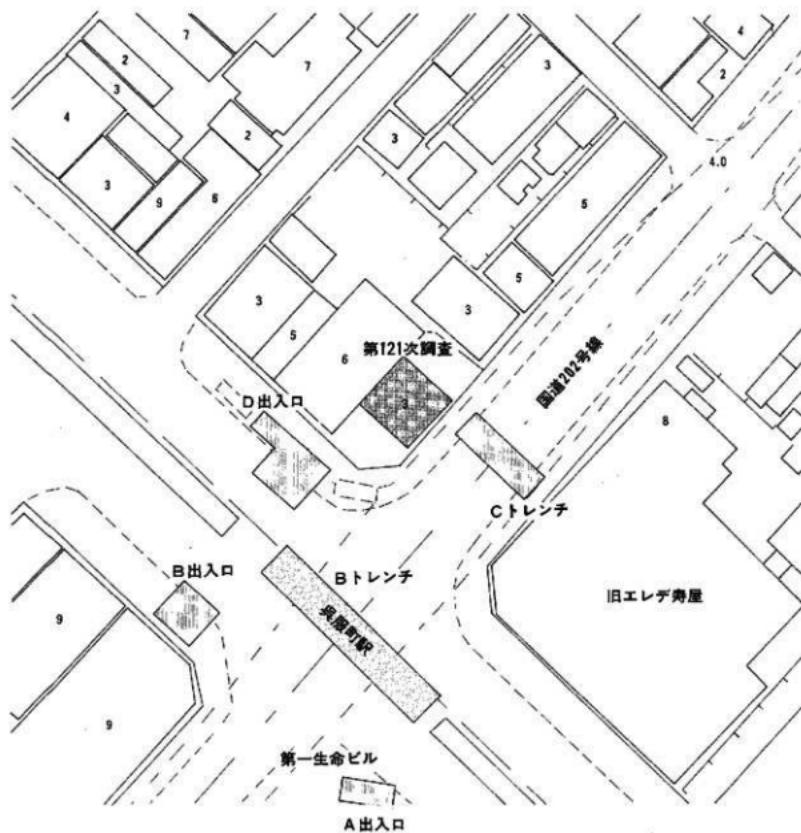
II 発掘調査の概要

調査地は博多遺跡群の南側砂丘の北端部に位置する。試掘調査で近現代の擾乱が深く及ぶことが確認され、調査は重機による約1.6mの盛土跡取り、土砂搬出から作業を開始した。その結果、試掘調査で確認された遺物包含層（黒灰色砂質土）は既存の建物解体の際に大きく擾乱を受けており、現地表下約2.0mの地山（黄白色砂層（標高2.3m））まで削平を受けていた。検出された遺構は井戸3基（12世紀と15世紀のもの）、石積土壤の断片1基、土壤数基と柱穴・ピット状遺構数個で、他の掘り込みはすべて擾乱、そのほとんどはバックホーのバケットや爪の痕跡であった。1987（昭和62）年に北



第1図 博多遺跡群発掘調査地域図(1/7,500)

東隣接地で試掘調査が行われているが、地表下1.5mから中世の造構面、-2.0mで地山の黄白色砂層が確認され、造構の残りは良好であった。年末年始をはさんで、翌5日から調査を再開、6日に残上置き場を除いた調査区の2/3の全景写真撮影、7日に造構実測を終え、残り1/3の残土の移動は予め14日に設定されていたため、調査は1週間中断し、17日から調査を再開した。18日に写真撮影、19日に造構実測を終え、22日の発掘機材の撤収をもって調査が終了した。



第2図 博多遺跡群第121次調査地域周辺図(1/1,000)

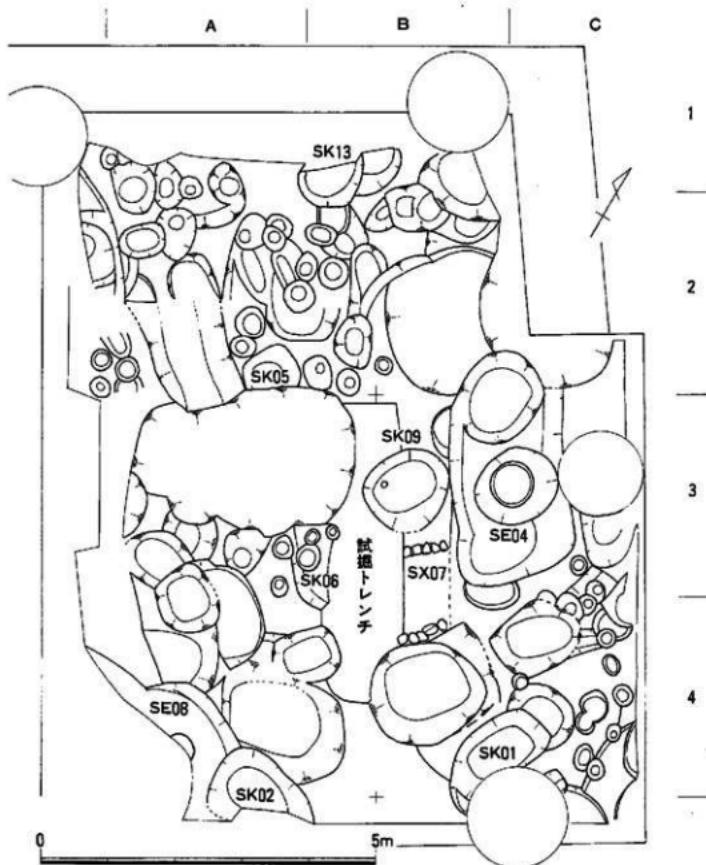
III 遺構と遺物

1 検出遺構

井戸

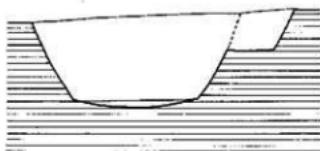
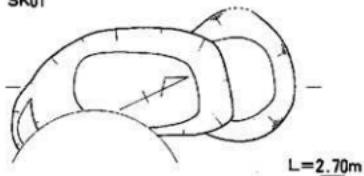
SE04 (第5図、図版1) 調査区の東中央C-3で検出した。掘り方は上面径1.2mの円形を呈し、深さは2.2m、底面の標高0.4mを測る。

SE08 (第4図、図版2) 調査区の南端部A-4で検出した。南半分は擾乱を受け、東側はSK02土壤に切られている。掘り方は残存長1.5mを測り、深さは1.5m、底面の標高0.5mを測る。基底部

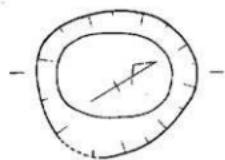


第3図 博多遺跡群第121次調査造構配図(1/75)

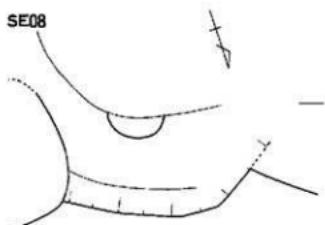
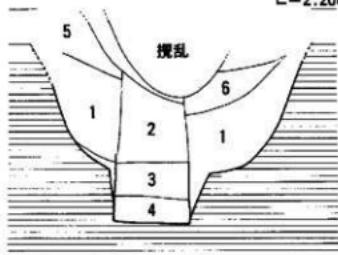
SK01



SK09



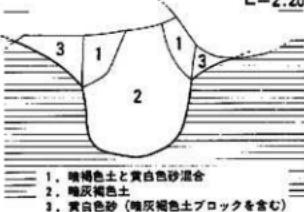
SE08

 $L = 2.20m$ 

- 擾乱
 1. 反褐色土と白色砂の互層
 2. 反褐色砂
 3. 反褐色砂質土
 4. 白色砂（反褐色砂混じり）
 5. 白色砂
 6. 白色砂（反褐色砂質土ブロックを含む）

0 2m

SK13

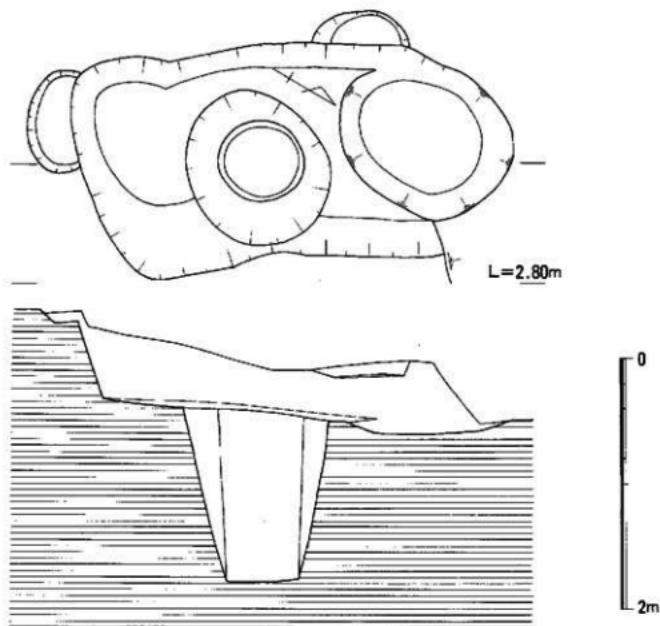
 $L = 2.20m$ 

SX07



0 2.80m

第4図 SK01・09・13、SE08、SX07実測図(1/40)



第5図 SE04実測図(1/40)

中央に上端径50cm、下端径55cm、深さ50cmの桶側の痕跡とみられる木質が残存していた。

土壤

SK01 (第4図、図版3) 調査区の東側B-4で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。北側は擾乱を受け、西側は調査に先行して打ち込まれたコンクリート杭によって破壊されている。全長1.5m、幅85cm、深さ75cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。N-30°-Eに方位をとる。

SK02 (第3図、図版1) 調査区の東側A-4で検出した。平面形は梢円形を呈する。南東は調査区南壁面にかかる。全長1.7m、幅1.2m以上、深さ1.0mを測る。壁は斜めに立ち上がる。N-30°-Eに方位をとる。

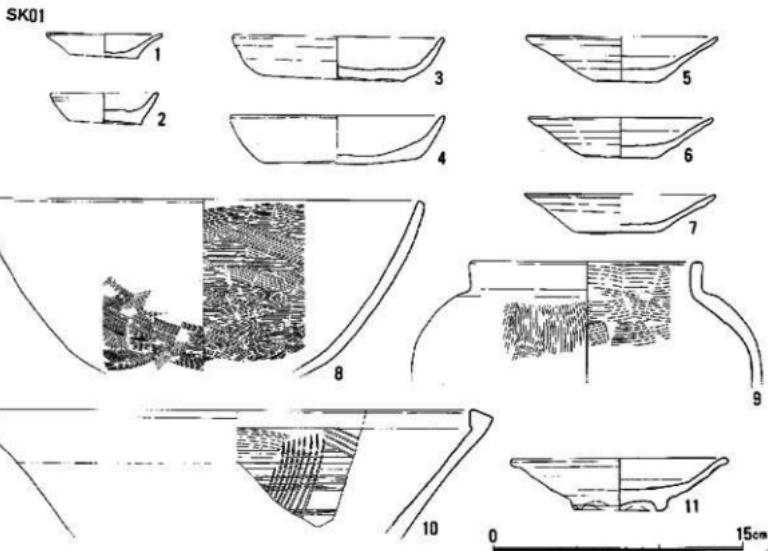
SK05 (第3図、図版1) 調査区の中央A-2で検出した。平面形は略円形を呈する。南側は擾乱を受けている。径80cm、深さ35cmを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。

SK09 (第4図、図版3) 調査区の中央B-3で検出した。平面形は梢円形を呈する。全長1.3m、幅1.1m、深さ45cmを測る。壁は斜めに立ち上がる。N-30°-Eに方位をとる。

SK13 (第4図、図版3) 調査区の北側B-1で検出した。平面形は略円形を呈する。北西は調査区北壁面にかかる。径1.2m、深さ1.0mを測る。壁はほとんど直に立ち上がる。

石積土壤

SX07 (第4図、図版2) 調査区の中央B-3で検出した。擾乱、試掘トレンチにより東西の側石が消失して、南北側石が1.2mの間隔をとって残存するのみである。北側の石積は2段分残存する。土壤の掘り方は検出できなかった。主軸方位はN-45°-Eにとる。



第6図 SK01出土遺物実測図(1/3)

2 出土遺物

SK01出土遺物（第6図、図版5）

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿（1・2） 体部から内底まで回転横ナデされる。1は器壁は薄く、端反りの口縁部をもつ。口径7.0cm、器高1.4cm、底径7.0cmを測る。胎土には細かい砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。2は器高がやや高く、口径に比べ底径がやや減じる程度で、外面の口縁下に凹線をめぐらす。口径6.5cm、器高1.8cm、底径4.3cmを測る。胎土には砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。

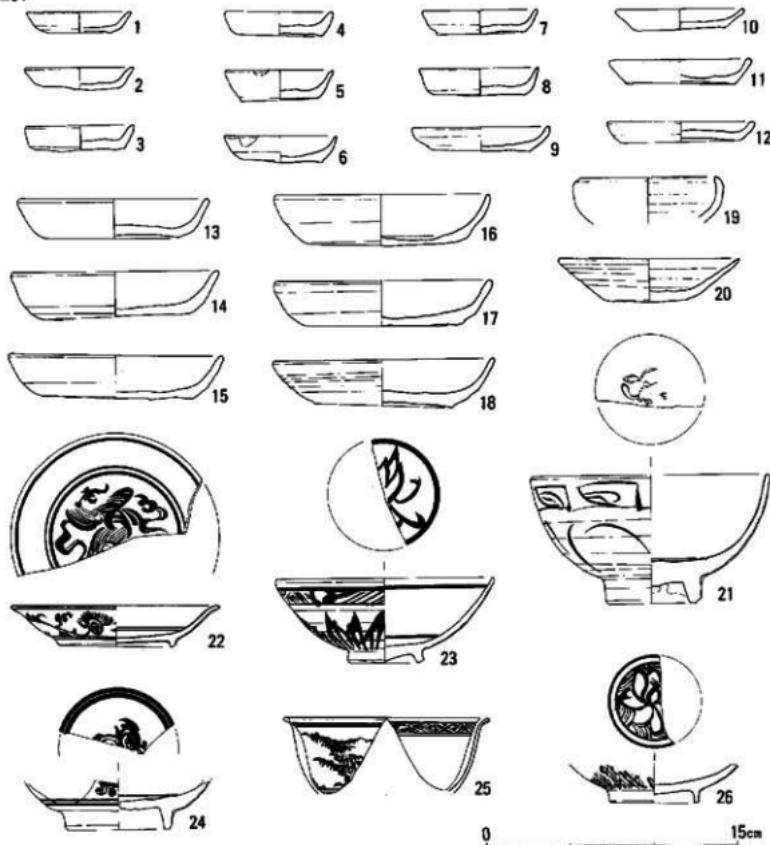
杯（3～7） 3は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕が残る。口径12.6cm、器高2.5cm、底径8.1cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。4～7は内底まで回転横ナデされる。4は口径12.8cm、器高2.9cm、底径9.1cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。5～7は3・4より、器壁は薄く、口径に比した底径の割合を減している。口径11.1～11.5cm、器高2.3～2.7cm、底径4.1～5.0cmを測る。胎土には細かい砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。

鍋（8） 口縁部と体部の境はない。口縁端部から体部外面上半にかけて横ナデ仕上げされ、体部外面上半の所々には指頭压痕の凹凸が残る。内面と体部外面下半は斜め方向に刷毛目調整している。復元口径26.2cmを測る。胎土には砂粒を含み、明赤褐色を呈する。外面には煤が付着している。

瓦質土器

湯釜（9） 口縁部が直立する湯釜の上半部片で、肩部の耳が欠失している。口縁部外面は横ナデ、内面は横方向に、体部外面は縱方向に刷毛目調整している。復元口径14.0cmを測る。胎土には粗い

SE04



第7図 SE04出土遺物実測図(1/3)

砂粒を多量に含み、黒色を呈する。

壺鉢 (10) 口縁部を内側に折り曲げ、断面三角形をなす。口縁部内面から体部外面上半にかけて横ナデ、体部外面下半は不定方向のナデ仕上げされている。体部内面は横方向に刷毛目調整した後、8条単位の筋目が入る。胎土には砂粒を多量に含み、黒色を呈する。

白磁

皿 (11) 内面の体部と底部の境には沈匿線をめぐらし、内底には4ヶ所目痕が残る。高台疊付4ヶ所が焼成後打ち欠かれている。重ね焼きで溶着したものと打ち欠いたものとみられる。灰白色(7.5Y7/1)の胎土の無色透明の釉が全面に掛けられている。

SE04出土遺物 (第7図、図版6) 1・8・13・21・25は井戸枠内からの出土である。

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿（1～12） 口径が小さく器が高い1～8と口径がやや大きく器高い9～12に大別される。1～8はすべて体部から内底まで回転横ナデされる。口径6.2～7.1cm、器高1.3～1.8cm、底径3.8～5.6cmを測る。胎土には細かい砂粒を少量含み、にぶい黄橙～浅黄橙色を呈する。5・6の口縁部には煤が付着している。9～12は9が体部から内底まで回転横ナデされる以外は、体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径7.7～8.8cm、器高1.2～1.4cm、底径5.3～7.2cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。

杯（13～20） 13は体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。法量は小さく、口径11.5cm、器高2.3cm、底径8.0cmを測る。胎土には粗い砂粒を多量に含み、浅黄橙色を呈する。14～18は内底まで回転横ナデされる。口径12.4～13.3cm、器高2.6～3.1cm、底径8.3～9.4cmを測る。胎土には砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。19は体部から口縁部まで内溝し、端部は平坦におさめ外傾する。残存する部位は回転横ナデされ、復元口径8.0cmを測る。胎土には細かい砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。20の器壁は薄く、口径に比した底径の割合は小さい。体部から内底まで回転横ナデされる。胎土には粗い砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。

青磁 碗（21） 外面口縁下に雷文、体部に蓮弁のヘラ書き文様を施す。内底見込みには花文をスタブする。復元口径14.3cm、器高7.6cm、高台径5.7cmを測る。灰色の胎土に、オリーブ黄色(7.5Y6/3)の釉が高台内側の途中まで施釉される。

青花

皿（22） 口縁端反りの高台付皿B群である。外面は口縁部と腰部に界線をめぐらせ、その間の体部に牡丹唐草を配す。内底見込みは二重の界線をめぐらせ、玉取り獅子を配す。復元口径12.4cm、器高2.5cm、高台径7.1cmを測る。

碗（23～26） 23は浅日の蓮子碗C群である。外面は口縁部に波涛文、体部に蕉葉文を配し、内底見込みには界線をめぐらせ、蓮華を配す。復元口径13.0cm、器高5.0cm、高台径5.4cmを測る。24は直に高台を削り出した碗D群の底部片である。外面腰部に界線がめぐり、その上部に文様を配す。内底見込みは二重の界線をめぐらせ、その内側に文様を配す。高台径6.4cmを測る。25は碗B群の端反りの口縁部片である。口縁部内面に四方陣文をめぐらせ、外面は口縁部と腰部に界線をめぐらせ、その間の体部に雲堂手風の風景を配す。復元口径12.2cmを測る。26は蓮子碗C群の底部片である。体部外面に蕉葉文、内底見込みには二重の界線をめぐらせ、蓮華を配す。高台径5.4cmを測る。

SK05出土遺物（第8図、図版7）

土師器 底部は回転糸切離しによる。

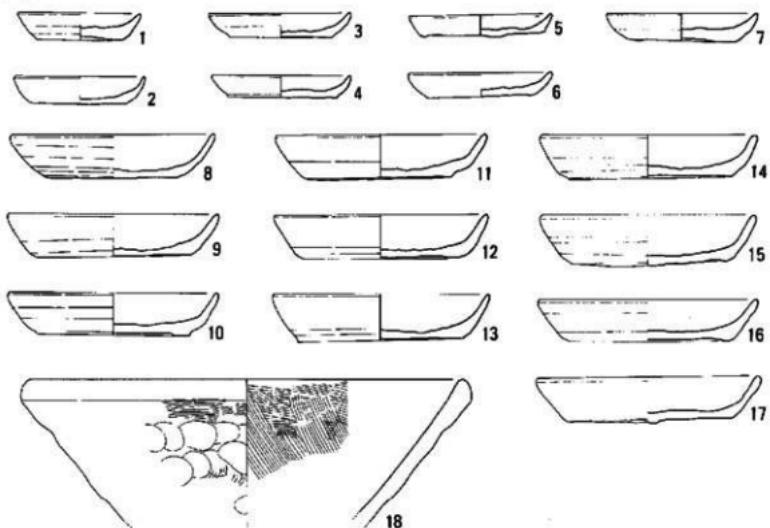
小皿（1～7） 1～6は体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径7.3～8.6cm、器高1.2～1.7cm、底径5.1～7.4cmを測る。胎土には砂粒を含み、1が橙色、2～6はにぶい黄橙色を呈する。7は体部から内底まで回転横ナデされる。口径9.0cm、器高1.6cm、底径6.3cmを測る。胎土には粗い砂粒を少量含み、にぶい橙色を呈する。

杯（8～17） 11・16が体部から内底まで回転横ナデされる以外は、体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径12.2～13.4cm、器高2.5～3.0cm、底径7.8～9.8cmを測る。胎土には粗い砂粒を含み、にぶい黄橙を呈する。

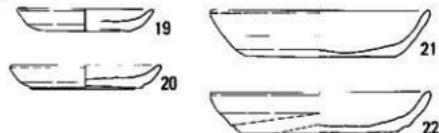
瓦質土器 捺鉢（18） 口縁端部は丸くおさめ外傾する。内面は刷毛目、外面は口縁部付近が横ナデ、口縁部下は横方向の刷毛目、体部は横方向に指頭圧痕の凹凸がめぐり、ナデ消されなかった刷毛目が一部に残る。復元口径25.5cmを測る。胎土には砂粒を含み、黒褐色を呈する。

SK02出土遺物（第8図、図版7）

SK05



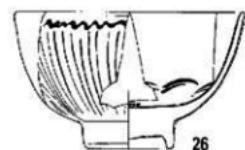
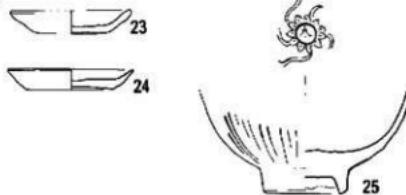
SK02



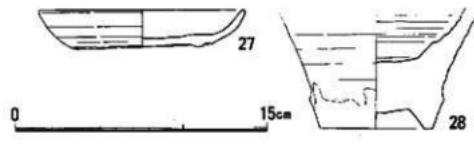
SK03



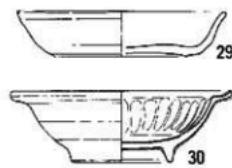
SX07



Pit06



Pit07



第8図 SK05-02、SX07、SK03、Pit06-07出土遺物実測図(1/3)

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿 (19・20) 体部から内底まで回転横ナデされる。口径8.2・8.9cm、器高1.3・1.4cm、底径5.2~6.7cmを測る。胎土には細かい砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。

杯 (21・22) 21は体部から内底まで回転横ナデされる。復元口径13.1cm、器高2.8cm、復元底径9.0cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。22は体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径13.1cm、器高2.5cm、底径9.4cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。

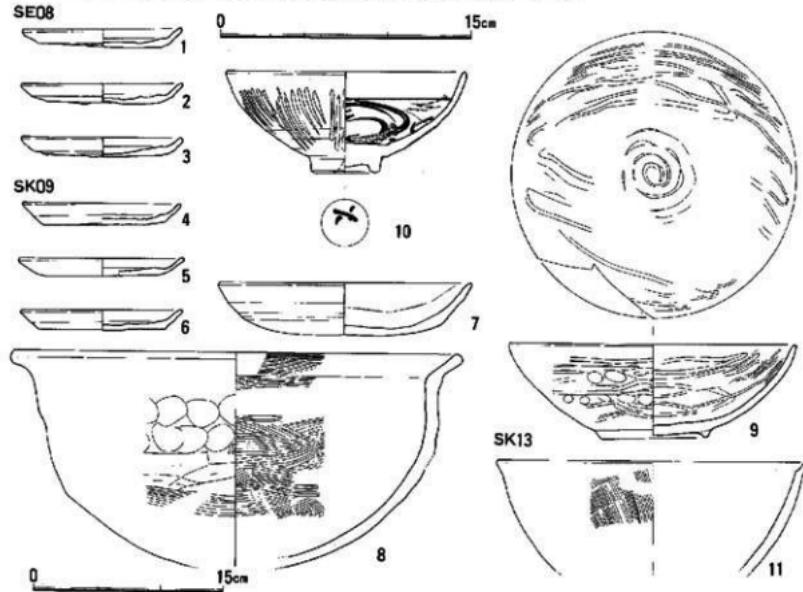
SX07出土遺物 (第8図、図版7)

土師器 小皿 (23・24) 底部は回転糸切離しによる。体部から内底まで回転横ナデされる。23は口径に比した底径の割合が小さく、口径7.2cm、器高1.4cm、底径4.0cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、精良である。にぶい黄橙色を呈する。24は復元口径7.5cm、器高1.3cm、底径5.1cmを測る。胎土には粗い砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。

青磁 碗 (25) 体部外面にヘラ先により細線の蓮弁文を施す。口縁部は欠失している。高台内側の削りが浅く、底部が厚くなっている。内底見込みには印花による文様を施す。高台径5.0cmを測り、灰色の胎土に、灰白色(7.5GY7/2)の釉が高台内側の途中まで施釉される。

SK03出土遺物 (第8図、図版7)

青磁 碗 (26) 体部外面に細線の蓮弁文をもつ。劍頭が波状にヘラ描きされ、蓮弁としての単位はほとんど意識されていない。高台内が浅い削りで、底部は厚くなっている。内底見込みには片切彫による文様を施す。復元口径13.8cm、器高8.1cm、高台径5.4cmを測り、灰色の胎土に、明緑灰色(7.5GY7/1)の釉を全面に施した後、外底の釉を輪状に削り取っている。



第9図 SE08、SK09、SK13出土遺物実測図(1/3・1/4)

Pit06出土遺物（第8図、図版7）

土師器 杯（27） 底部は回転糸切離しにより、体部から内底まで回転横ナデされる。口径12.3cm、器高2.2cm、底径8.1cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。

白磁 四耳壺（28） 底部が厚く、高台は外外面とも斜めに削り出されている。高台径6.8cmを測る。

Pit07出土遺物（第8図、図版7）

土師器 杯（29） 底部は回転糸切離しにより、体部から内底まで回転横ナデされる。口径12.4cm、器高2.7cm、底径7.7cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。

青磁 杯（30） 口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部を更に上方に引き上げている。体部内面に回蓮弁文を施す。復元口径13.2cm、器高4.3cm、高台径6.0cmを測り、灰色の胎土に、明オリーブ灰色(2.5GY7/1)の釉を全面に施した後、高台疊付を削り取り露胎としている。

SE08出土遺物（第9図、図版5）

土師器 小皿（1～3） 底部は回転糸切離しによる。体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕が残る。口径9.4～9.5cm、器高1.0～1.1cm、底径6.8～7.4cmを測る。胎土には細かい砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。

SK09出土遺物（第9図、図版5）

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿（4～6） 体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底部には板状圧痕が残る。口径9.4～9.8cm、器高1.0～1.3cm、底径6.8～7.7cmを測る。細かい砂粒を少量含む精良な胎土で、浅黄橙色を呈する。

丸底杯（7） 体部中位の屈曲部が肥厚し、内面には段が付く。内面をコテ状の工具により平滑にし、体部外面は回転横ナデ、外底部には板状圧痕が残る。口径15.1cm、器高3.2cmを測る。胎土には砂粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。

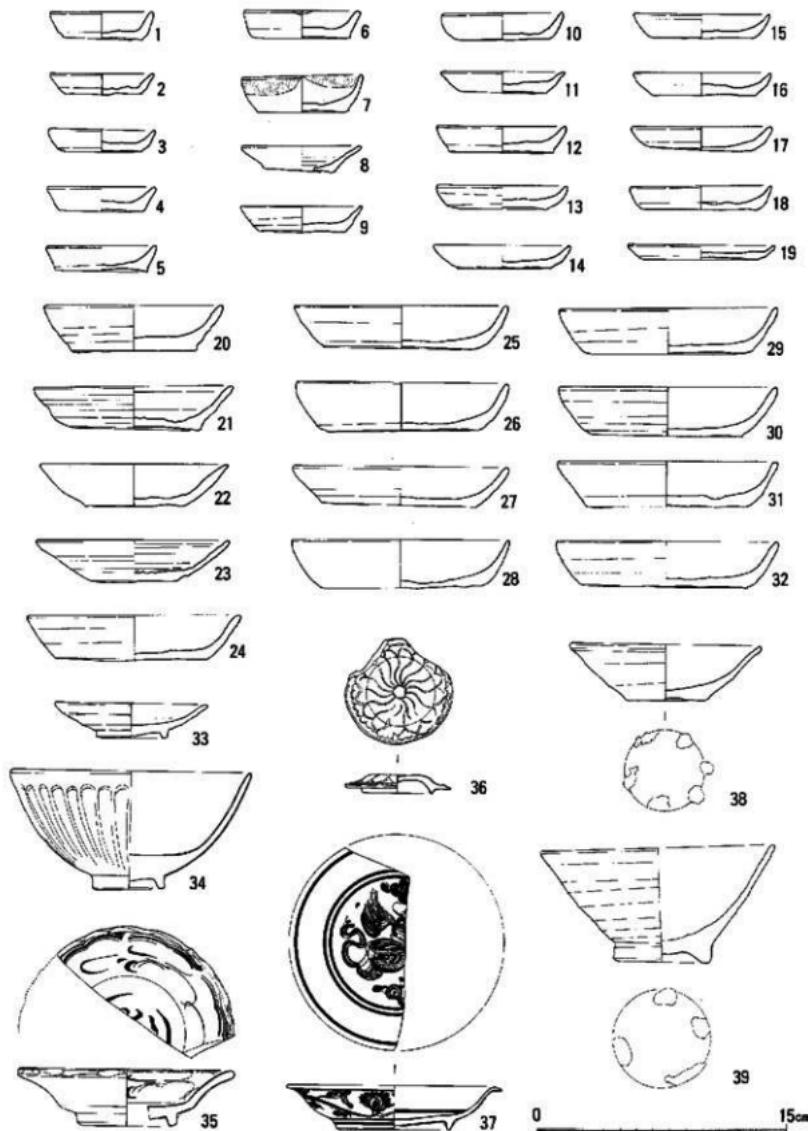
鍋（8） 口縁部が「く」の字状に屈曲し、底部は丸底の大型の鍋で、復元口径35.7cmを測る。内面は横方向の刷毛目、外面は口縁部が横ナデ、体部上位は縱方向の刷毛目の後、ナデを施し、横方向には指頭圧痕の凹凸がめぐり、ナデ消されなかつた縱方向の刷毛目が一部に残る。中位は横方向にヘラ削り、下位は横方向の刷毛目の後、ナデを施す。胎土には粗い砂粒を含み、橙色を呈する。外面には煤が付着している。

瓦器 梗（9） 体部は丸みをもち、口縁部はやや内湾する。体部外面は横方向にヘラ磨きされ、磨きの下には指頭圧痕の凹凸がめぐる。内面は一方向にヘラ磨きされ、内底見込みに粘土紐の接合痕が溝状に残る。断面半円形の貼り付け高台とその間開は横ナデされ、体部との境付近には糸切り離し痕が残る。口径17.2cm、器高5.6cm、高台径7.0cmを測る。精良な胎土で、外面から口縁部内面にかけて暗青灰色、その他の部位は明赤灰色を呈する。

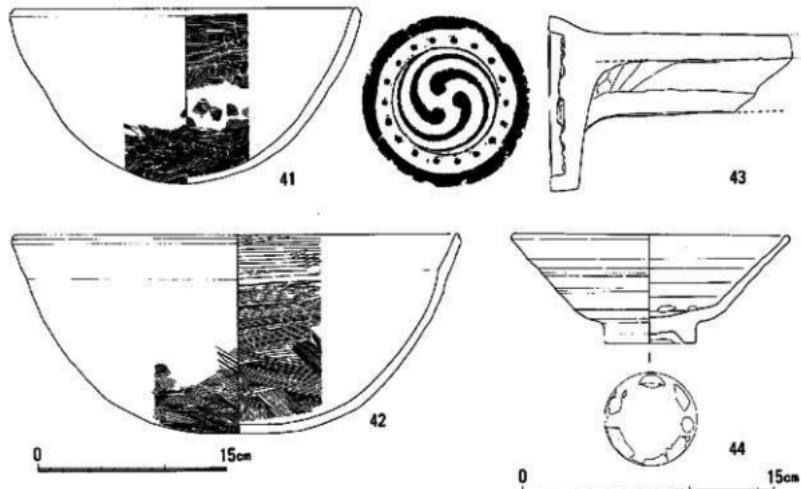
青磁 瓢（10） 体部は丸みをもち、口縁部は直線的に外上方にのびる。口縁下内面には沈線がめぐる。高台は断面四角形を呈し、高台内側は平坦に削られている。体部外面にヘラ状の工具による条線、内面には之字形点綴文を施す。復元口径14.3cm、器高6.1cm、高台径4.1cmを測る。灰白色の胎土に、オリーブ黄色(7.5Y6/3)透明の釉が高台付近まで施され、ピンホールがみられる。

SK13出土遺物（第9図、図版5）

土師器 鍋（11） 体部は丸みをもち、口縁端で屈曲し、内面は稜をなす。復元口径24.8cmを測る。胎土には砂粒を多量に含み、橙色を呈する。外面には煤が付着している。



第10図 包含層出土遺物実測図(1)(1/3)



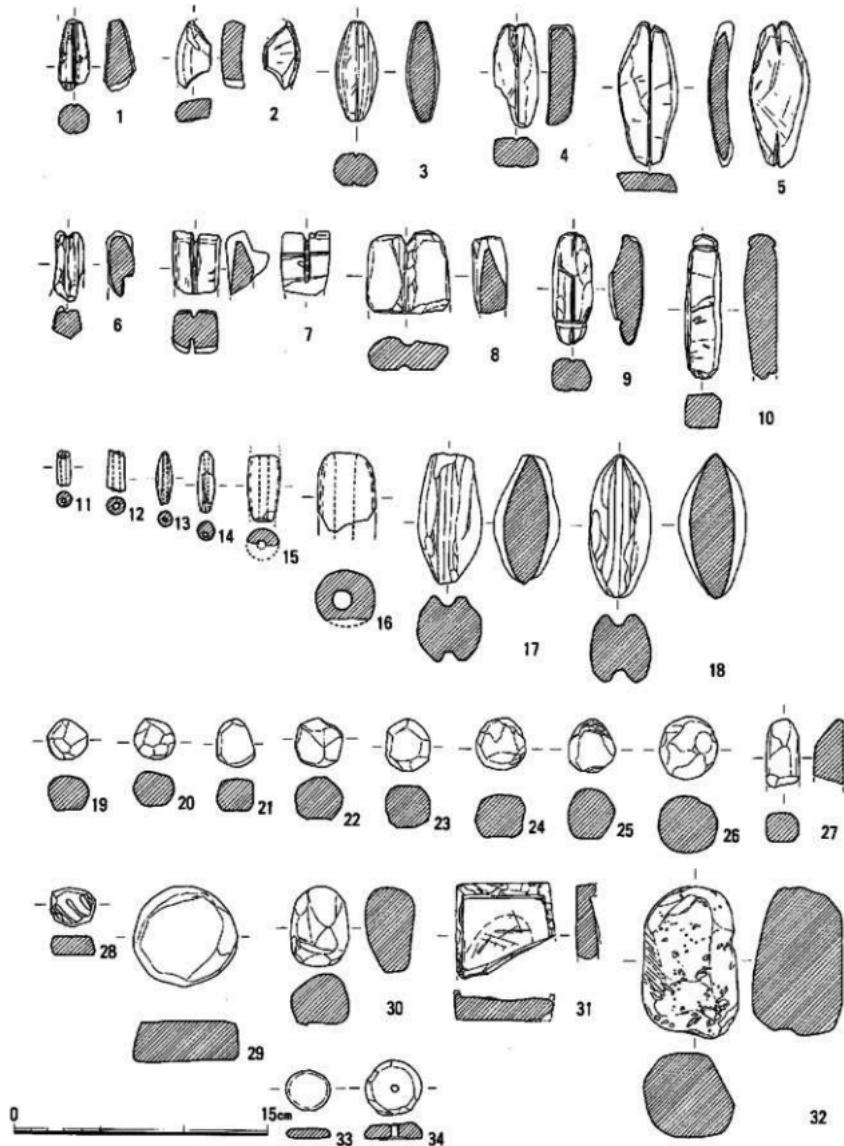
第11図 包含層出土遺物実測図(2)(1/3+1/4)

包含層出土遺物 (第10・11図、図版8・9) 前述の通り、遺物包含層は建物解体の際大きく擾乱を受けており、造構に伴う遺物と混在する結果となった。島状に残された包含層は人力で掘り下げ、3m四方のグリット単位で取り上げた。グリットの設定は第3図の遺構配置図に示す通りである。基本的には包含層の時期は16世紀前後と考えている。包含層出土遺物の中、同じグリット内の造構にともなう可能性も大きいため、括弧内に個々の遺物について取り上げたグリットを記す。

土師器 底部は回転糸切離しによる。

小皿 (1~19) 1~3・5・9~12・15~17・19は体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底部には板状圧痕が残る。4~6~8~13~14~16~18は体部から内底まで回転横ナデされる。1(C-2)は口径6.2cm、器高1.6cm、底径4.7cmを測る。2~4~6(C-3)は口径6.2~6.5~7.0cm、器高1.3~1.5~1.6cm、底径4.6~4.7~5.8cmを測る。6の口縁部には煤が付着している。3~5(B-2)は口径6.4~6.6cm、器高1.5~1.5cm、底径4.8~5.5cmを測る。7(A-4)は口径7.2cm、器高2.2cm、底径5.5cmを測る深めの小皿で、口縁部に煤が付着している。8(B-4)は口径7.2cm、器高1.5cm、底径4.3cmを測り、口径に比した底径の割合が小さく、器壁は薄い。9~10(A-2)は口径7.3~7.1cm、器高1.6~1.6cm、底径5.3~5.5cmを測る。11(C-3)は口径7.4cm、器高1.5cm、底径5.1cmを測る。12(C-2)は口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.2cmを測る。13(グリット不明)は口径7.8cm、器高1.4cm、底径5.3cmを測る。14~17(B-2)は口径8.2~8.5cm、器高1.4~1.4cm、底径6.0cm~6.2cmを測る。15(B-4)は口径8.2cm、器高1.5cm、底径6.2cmを測る。16~18(A-4)は口径8.2~8.5cm、器高1.3~1.4cm、底径6.3cm~7.0cmを測る。19(A-4)は口径8.8cm、器高0.9cm、底径7.0cmを測る。

杯 (20~32) 20~22~27~28~31~32は体部を回転横ナデ、内底はナデ、外底部には板状圧痕が残る。他は体部から内底まで回転横ナデされる。20(B-4)は口径10.7cm、器高2.7cm、底径7.5cmを測る。21(B-2)はロクロ目が残り強く稜をなしている。口径10.8cm、器高2.6cm、底径8.8cmを測る。



第12図 石製品・土製品実測図(1/3)

22(A-2)は口径11.2cm、器高2.5cm、底径6.0cmを測り、口径に比した底径の割合が小さいが、器壁は薄くはない。23(C-3)は口径11.5cm、器高2.4cm、底径5.2cmを測り、口径に比した底径の割合が小さい。器壁は薄く、ロクロ目が残り強く稜をなしている。24(B-2)は口径12.7cm、器高2.7cm、底径9.5cmを測る。25・30・31(A-2)は口径12.8・13.2・13.3cm、器高2.5・2.9・2.7cm、底径9.5・9.2・9.6cmを測る。26・28・29(A-4)は口径12.8・13.0・13.2cm、器高2.9・2.8・2.7cm、底径9.0・9.5・9.3cmを測る。27(B-1)は口径13.0cm、器高2.3cm、底径9.2cmを測る。32(グリット不明)は口径13.4cm、器高2.7cm、底径9.8cmを測る。

白磁 盆(33) 断面四角形の高台付皿で、内底見込みに沈圈線がめぐる。口径9.1cm、器高2.1cm、高台径4.2cmを測る。灰白色の胎土に灰オリーブ色(7.5Y6/2)の釉が体部外面上半まで施されている。C-4区出土。

青磁

碗(34) 体部外面に凹蓮弁文を施す。復元口径14.4cm、器高7.0cm、高台径4.3cmを測り、灰白色の胎土に、灰オリーブ色(7.5Y6/2)の釉を全面に施した後、高台疊付の削り取り露胎としている。出上グリットは不明。

皿(35) 復元口径12.8cm、器高2.4cm、高台径6.0cmを測る稜花皿である。灰色の胎土に、灰色(7.5Y6/1)の釉を全面に施した後、外底の釉を削り取っている。

青白磁 小壺蓋(36) 天井部に團花文を型押し、内面は横ナデを施す口径6.3cm、器高1.1cm、返り径4.0cmを測る。白色の胎土に、無色透明の釉が天井部に施されている。B-2区出土。

青花 皿(37) 端反り口縁の皿B群である。外面は界線間に牡丹唐草、内底見込みには二重の界線の中に玉取り獅子を配す。復元口径12.8cm、器高2.7cm、高台径6.6cmを測る。

雜軸陶器 朝鮮王朝陶磁器である。

皿(38) 体部が直線的に開く高台付皿で、高台の内割りは僅かである。口径11.5cm、器高3.4cm、高台径4.8cmを測る。灰色の胎土に灰黃色(2.5Y6/2)の釉が全面に掛けられる。高台に目痕が6ヶ所残る。A-4区出土。

碗(39・40) 39は体部が直線的に開く深めの碗である。復元口径14.1cm、器高6.8cm、高台径5.9cmを測る。直径0.5mm前後の白色微粒子、黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰白色(10Y6/1)の釉が全面に掛けられ、ビンホールがみられ、外底部はカイラギ状を呈する。高台に目痕が4ヶ所残る。C-3区出土。40はやや外反気味に開き、口縁端部を僅かに上方に引き上げている。復元口径16.6cm、器高5.4cm、高台径6.4cmを測る。直径0.5mm前後の白色微粒子、黒色微粒子を含む灰白色的胎土に灰白色の釉が全面に掛けられ、ビンホールがみられ、腰部から外底部にかけてカイラギ状を呈する。平坦な内底見込み、高台に目痕が7ヶ所残る。B-2区出土。

土師器 鍋(41・42) 41は口縁部と体部の境はない。口縁端部から体部外面上半にかけて横ナデ仕上げされ、内面と体部外面下半は斜め方向に刷毛目調整している。口径27.0cm、器高14.0cmを測る。胎土には砂粒を多量に含み、やや赤みを帯びた黒褐色を呈する。外面には煤が付着している。C-3区出土。42は口縁部が僅かに屈曲し、内面は稜をなす。口縁端部から体部外面上半にかけて横ナデ仕上げされ、体部内面上半は横方向、体部内外面下半は斜め方向に刷毛目調整している。口径35.7cm、器高14.0cmを測る大型の鍋である。胎土には砂粒を多量に含み、暗褐色を呈する。外面には煤が付着している。C-3区出土。

軒丸瓦(43) 瓦当径13.5cmで、内区は右巻きの三つ巴文である。外区は珠文18個を配す。周縁の幅は1.5cmを測る。

石製品・土製品（第12図、図版10）2・16・27がPit04、3・8・12・29がSE04、5・6がSK13、21がSK02、他は包含層からの出土である。

石錘（1・3～10・17・18）1・3～10の石材は滑石製で、紡錘型や短冊型の形態をとり、紐かけの溝を配している。17・18の石材は砂岩で、紡錘型の長軸に沿った2本の溝を配している。

槌杖球（19～26）直徑2cm前後の小型のもので、石材は砂岩である。

瓦玉（28・29）瓦や陶器を再利用している。

硯（31）陸部分の大半が欠失している。

他に土錘（11～16）、基石（33）、滑石製紡錘車（34）、用途不明の滑石製品（2）、輕石製品（32）が出土。

IV 小 結

本調査区の周辺では地下鉄建設に伴って小規模ながら発掘調査が行われている。第2図に示す通りである。第1図の地形図では砂丘にはさまれた低い部分は「袖の渓跡」と推定されてきた。地下鉄呉服町駅建設に伴って調査された呉服町交差点の中央部にあたる呉服町工区本体部Bトレンチ（1978年調査）では、標高約1mで遺物包含層、石列が確認されている。交差点東側約50mのCトレンチは本調査の東南約10mに位置するが、表土壠削の後標高約1mより下のレベルで土層観察したところ、調査前の壠削の際に既に削平されていたため、上層から掘り込まれた井戸の他は遺構は検出されず、遺物包含層もみられなかった。これらの結果を受けたB換気塔部分の調査（1981年）区域は本調査の東約100mに位置するが、調査前の壠削により包含層が僅かに残るのみであったが、標高約1.5m以上での遺構面が想定された。交差点四隅の出入口部分の調査（1981年）の中、交差点北側D出入口の調査区域は本調査の西南約20mに位置するが、標高約1.5mで、12世紀以降の井戸、溝、土壙等の遺構が検出されている。交差点南隅のA出入口、西隅のB出入口より遺構面のレベルは50～60cm高くなっていた。

本調査で確認された遺構面（石積土壙を除きほとんどが地山）の標高が2.6mを測り、1987年の北東隣接地の試掘調査で確認された地表下1.5mから中世の遺構面、-2.0mで地山の黄白色砂層との所見とあわせ考えると、本調査地は地下鉄建設に伴う一連の調査で検出された博多浜と息の浜とを結ぶ陸橋とされる部分より約1m高くなり、息の浜東端部に立地すると考えられる。

各遺構の時期については、遺構の残存がよくない割には土師器がまとまった数量出土しており、近辺の研究成果等により大きな年代を求めることができる。最も古いものがSE08・SK09で、底部の切り離しへ移行した直後、口径が9.5cm前後と更に小型化する前の段階に位置し、さらにSK09からは底部糸切離しの口径15cmを測る消滅する直前の小型の丸底杯が残ることから、12世紀前半から中期と推測される。SK09出土の同安窯系の施文の青磁碗についても、丸みをもった体部、断面四角形の高台、高台付近までの施釉といった特徴から12世紀後半から出現する典型的な同安窯系青磁碗より古相を示すものである。SK02は出土土師器小皿の口径の平均値が8.2cm、杯の平均値が12.8cmを測り、最も小型化する前段階のもので、13世紀中頃から後半と考えられる。SK05の一組と同じ法量をとる土師器が出土しているSK05、Pit06・07についても同時期で、共伴する白磁四耳壺や龍泉窯系青磁碗III類も同じ時期にみられるものである。SE04の時期は出土の青花III群、蓮子碗C群から16世紀前後と考えられる。土師器杯6点の平均法量は口径12.7cm、器高2.7cm、底径8.8cmを測る。これらの青花が出現する前段階である博多遺跡群第94次調査SD102出土の土師器杯（18点の平均法量は口径12.3cm、器高2.5cm、底径8.8cm）よりやや大きくなっている。SE04の一組と同法量の土師器出土のSK01・SX07も同時期で、SX07からは体部外間に細線の蓮弁文をもつ青磁碗（高台内側の削りが

浅く、底部が厚くなっている)が出土している。

以上のことから造構が営まれた時期は3期で、それぞれの間には百年以上の空白がみられる。

参考文献

「博多—高速鉄道関係調査(4)-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集 1988 福岡市教育委員会

「博多66」福岡市埋蔵文化財調査報告書第593集 1999 福岡市教育委員会

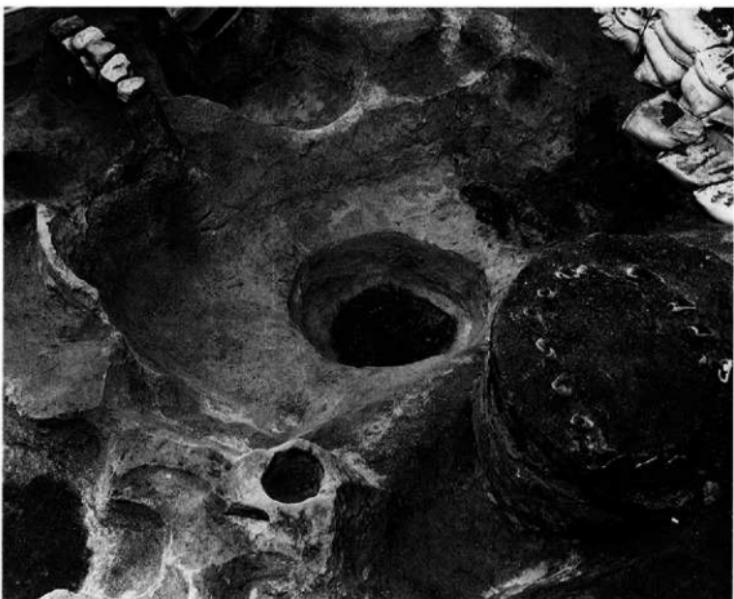
拂団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	拂団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	拂団 番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
SK01				6.	8.3	1.3	6.6	土師器	丸底杯		
土師器	小皿			7.	9.0	1.6	6.3	7.	15.1	3.2	
1.	7.0	1.4	4.1	土師器	杯				瓦器	碗	
2.	6.5	1.8	4.3	8.	12.2	2.6	7.8	9.	17.2	5.6	7.0
土師器	杯			9.	12.6	2.5	9.1	包含層			
3.	12.6	2.5	8.1	10.	12.6	2.5	9.1	土師器	小皿		
4.	12.8	2.9	9.1	11.	12.6	2.5	8.8	1.	6.2	1.6	4.7
5.	11.5	2.7	4.1	12.	12.8	2.6	9.4	2.	6.2	1.3	4.6
6.	11.1	2.4	4.6	13.	13.0	2.8	9.8	3.	6.4	1.5	4.8
7.	11.5	2.3	5.0	14.	13.0	2.6	9.7	4.	6.5	1.5	4.7
SE04				15.	12.9	3.0	9.2	5.	6.6	1.5	5.5
土師器	小皿			16.	13.2	2.5	9.4	6.	7.0	1.6	5.8
1.	6.2	1.3	3.8	17.	13.4	2.7	9.8	7.	7.2	2.2	5.5
2.	6.5	1.3	4.5	SK02				8.	7.2	1.5	4.3
3.	6.5	1.5	5.6	土師器	小皿			9.	7.3	1.6	5.3
4.	6.5	1.4	5.2	19.	(8.2)	1.3	(5.2)	10.	7.1	1.6	5.5
5.	6.5	1.8	4.6	20.	(8.9)	1.4	(6.7)	11.	7.4	1.5	5.1
6.	6.7	1.6	4.9	土師器	杯			12.	7.8	1.6	5.2
7.	6.9	1.4	5.3	21.	(13.1)	2.8	(9.0)	13.	7.8	1.4	5.3
8.	7.1	1.7	5.5	22.	13.1	2.5	9.4	14.	8.2	1.4	6.0
9.	8.2	1.4	5.8	SX07				15.	8.2	1.5	6.2
10.	7.7	1.2	5.3	土師器	小皿			16.	8.2	1.3	6.3
11.	8.5	1.4	5.8	23.	7.2	1.4	4.0	17.	8.5	1.4	6.2
12.	8.8	1.2	7.2	24.	(7.5)	1.3	5.1	18.	8.5	1.4	7.0
土師器	杯			Pit06				19.	8.8	0.9	7.0
13.	11.5	2.3	8.0	土師器	杯			土師器	杯		
14.	12.4	2.7	8.8	27.	12.3	2.2	8.1	20.	10.7	2.7	7.5
15.	12.8	2.6	8.9	Pit07				21.	10.8	2.6	8.8
16.	12.9	3.1	9.1	土師器	杯			22.	11.2	2.5	6.0
17.	13.1	2.7	9.4	29.	12.4	2.7	7.7	23.	11.5	2.4	5.2
18.	13.3	2.7	8.3	SE08				24.	12.7	2.7	9.5
19.	8.0	.	.	土師器	小皿			25.	12.8	2.5	9.5
20.	10.8	2.6	4.5	1.	9.4	1.0	7.4	26.	12.8	2.9	9.0
SK05				2.	9.5	1.1	6.8	27.	13.0	2.3	9.2
土師器	小皿			3.	9.5	1.1	6.9	28.	13.0	2.8	9.5
1.	7.3	1.6	5.1	SK09				29.	13.2	2.7	9.3
2.	8.6	1.4	6.1	土師器	小皿			30.	13.2	2.9	9.2
3.	7.8	1.7	5.6	4.	9.4	1.3	7.7	31.	13.3	2.7	9.6
4.	8.5	1.4	6.4	5.	9.8	1.0	6.8	32.	13.4	2.7	9.8
5.	8.5	1.2	7.4	6.	9.5	1.2	7.5				

第1表 出土土器計測表

図 版



(1) 博多遺跡群第 121 次調査区全景（北から）



(2) SE 04 井戸（東から）

図版 2



(1) SX 07 (東から)



(2) SE 08 井戸土層 (東から)



(1) SK 09 土壙（東から）

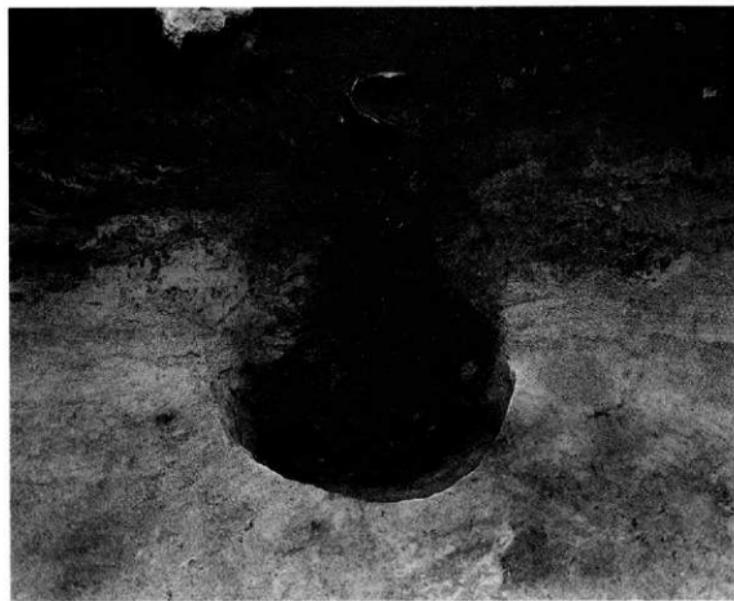


(2) 博多遺跡群第 121 次調査区北側（西から）

図版 4

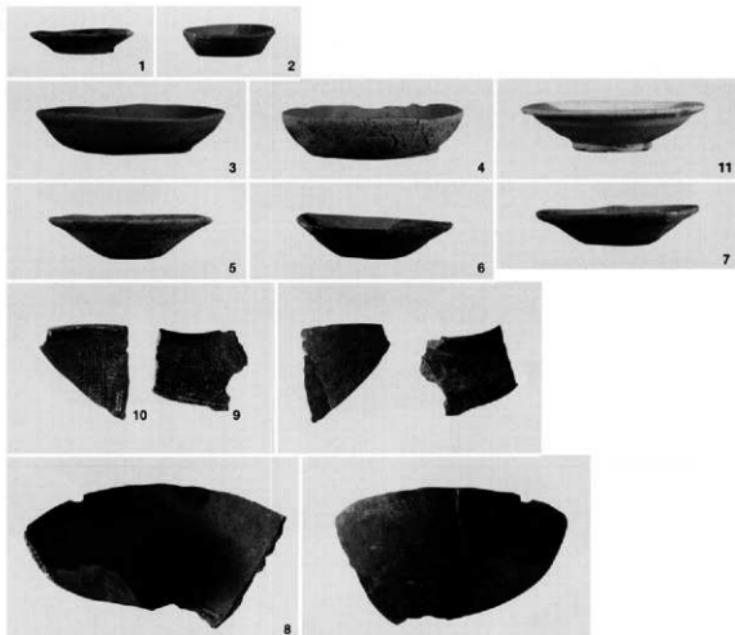


(1) 博多遺跡群第 121 次調査区北側（東から）

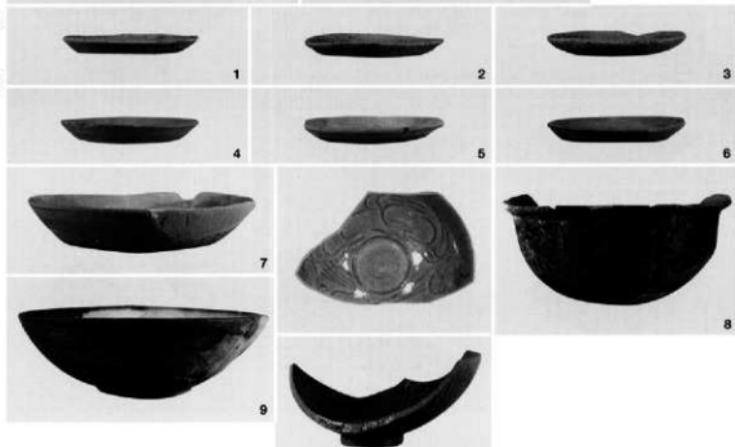


(2) SK 13（南から）

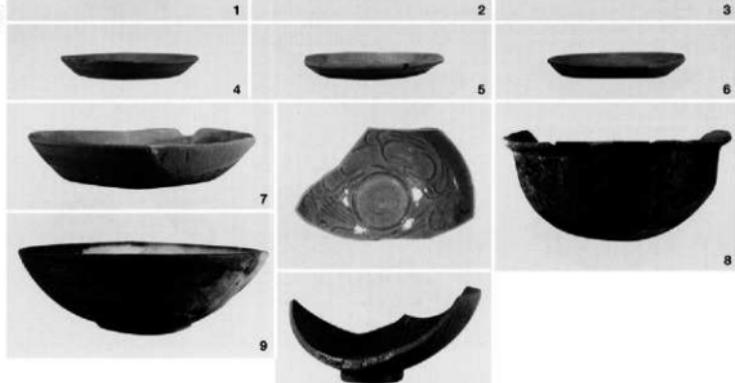
SK 01



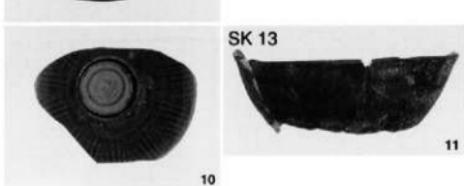
SE 08



SK 09

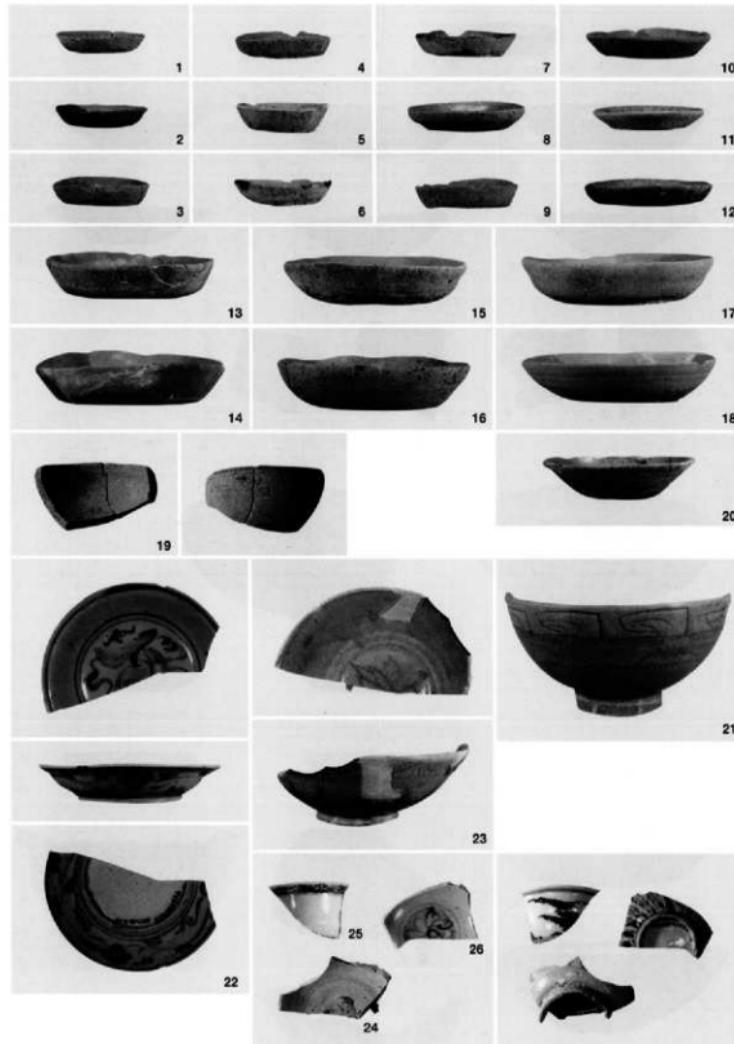


SK 13



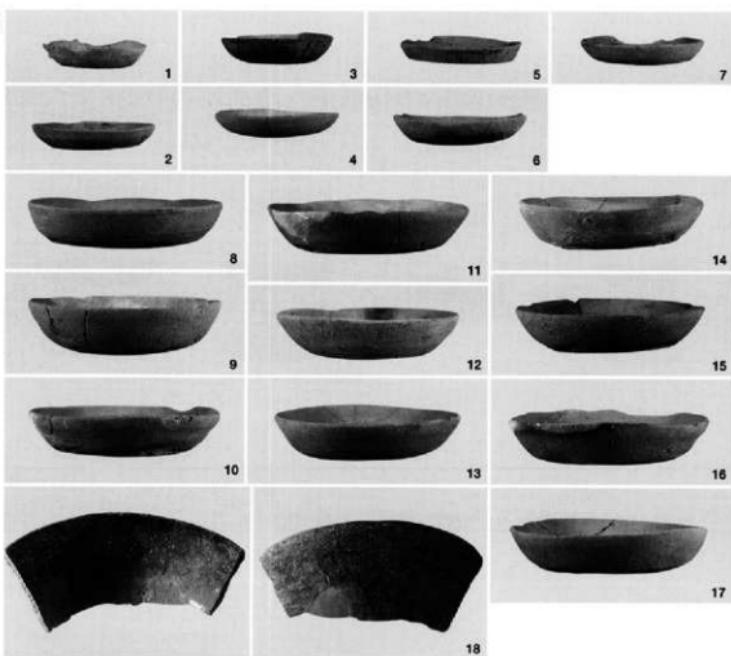
SK 01、SE 08、SK 09・SK 13 出土遺物

図版6



SE 04出土遺物

SK 05



SK 02

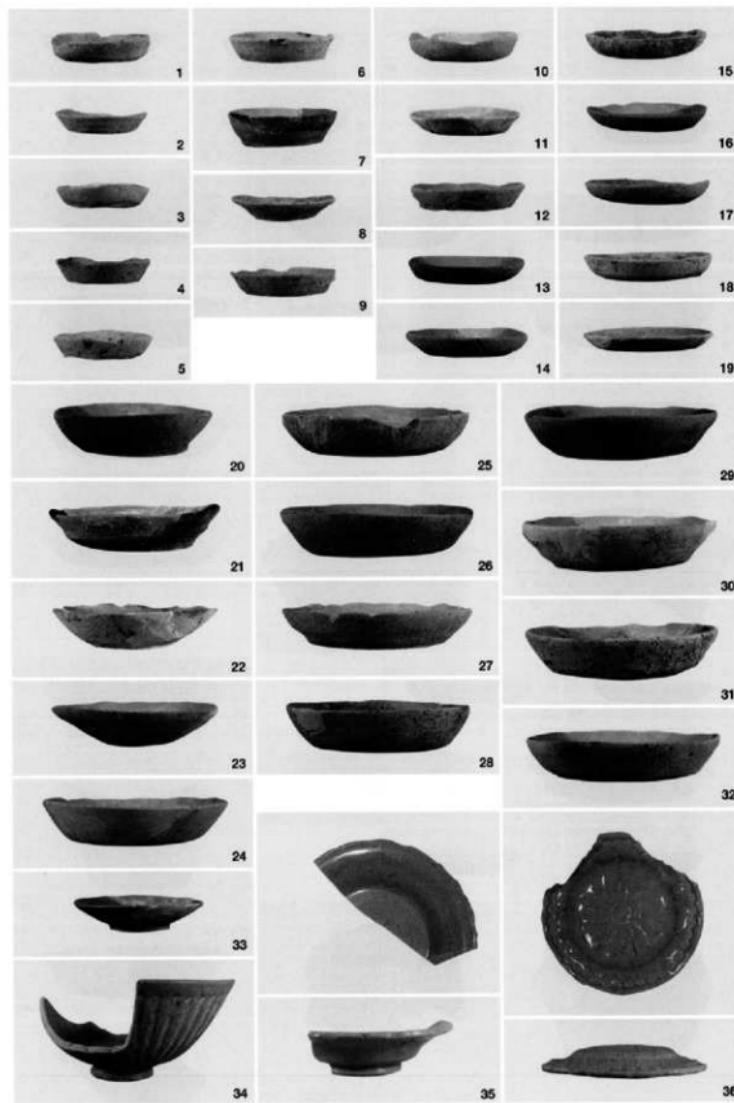


SX 07

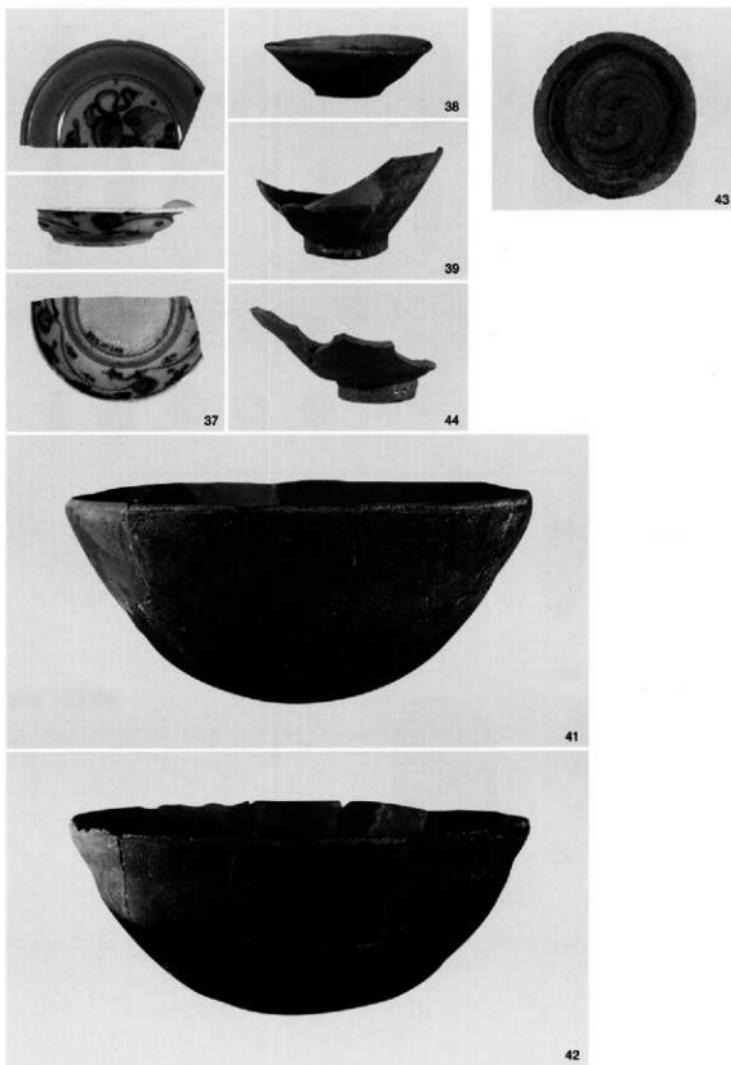


SK 05・02、SX 07、SK 03、Pit 06・Pit 07 出土遺物

図版 8

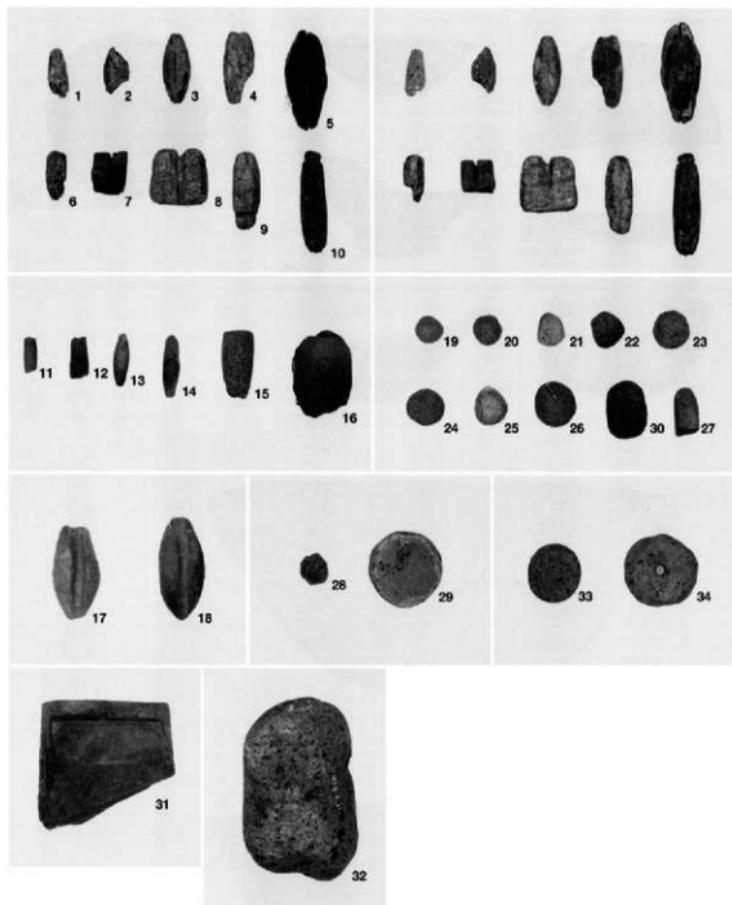


包含層出土遺物(1)



包含層出土遺物(2)

図版10



石製品・土製品

博多 78

— 博多造勢群第121次発掘調査報告 —

2001年（平成13年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大神1丁目8-1

印刷 有限会社 浦永印刷
福岡市東区原田1丁目9-23
